平成22年度 和歌山県名匠

【刀研師】

川上安一

【現 住 所】那智勝浦町
【生　　年】昭和23年

業績及び経歴

20歳の時、刀匠であった父に師事し、研師の道に入る。以来42年にわたり研ぎ一筋に研鑽を重ね、和歌山県立博物館の赤羽刀、熊野那智大社宝物太刀をはじめとした多数の文化財、神社宝物、奉納太刀などの研磨を行う。今も県内外から刀剣の研磨依頼を受けており、その確かな技と経験は高く評価されている。

1本の刀を研ぐのに、約2週間をかけるが、最も重要なのは刀剣の姿形を整える「下地研ぎ」であり、完成時の出来栄えを左右するという。また、刀文（焼入れによって現れる波模様）を美しく表現するため、薄く割った砥石で、親指の腹を使って研磨するが、特に帽子（切先）には力を入れるという。長年の研磨作業により固くなった親指は、その卓越した技と経験を物語っている。

財団法人日本美術刀剣保存協会主催の刀剣研磨外装技術発表会で5度の入選を果たし、同協会和歌山県支部評議員を務めるなど、伝統技術の保存継承に果たされた功績は多大である。

父の川上敏夫氏(刀銘　南紀川上竜子清光)は、昭和51年度の和歌山県名匠表彰受賞者であり、その貴重な刀剣保存技術は脈々と受け継がれている。